

第3回公開研究会 デンマークの教育に学ぶ

グルントヴィ・コル主義のフリースコーレ・エフタスコーレ

講師 Ejving Rosenvang 氏
(Glamsbjerg FRI- and EFTERSKOLE 校長)

この研究会にお招きいただき誠に光栄です。また、私の学校についてもお話しさせていただくことも大変うれしく思います。まず自己紹介をします。私は、Rosenvangといます。デンマークにある学校の校長をしています。今日は、デンマークの教育の背景にあるもの、すなわち教育の理念についてお話ししたいと思います。

まず、デンマークの学校には公立と私立があります。私が校長を勤めている学校は私立です。公立の学校についても多少は説明しますが、話の大部分は私立学校の制度についての話です。さて、本題に入る前に、教育の背景にある文化、日本の文化とデンマークの文化の違いについて話します。私は日本の文化についてそんなに造形が深くないのですが、調べてみたところ次のようなことが言えるのではないかと考えています。まず、日本を語る時にはどうしても自然災害、自然の力、自然の脅威については無視できませんね。具体的に2011年の東日本大震災が起きました。私はタベ、生まれて初めて地震を経験しました。ホテルの18階にいたので、私にはかなり長く揺れていたように感じました。

日本について調べてみて分かったことは、日本は山が多い。国土の大部分が山であるということです。だから道路を作るにしても、家を建てるにしても、畑を開くにしても、その周りの地形のことを考えなければなりません。また、日本は都市と農村部、あるいは非都市部といったほうがいいかな、その落差が非常に大きい。人口の大部分は都市に集中しており、都市的な文化と農村の文化の差も非常に大きいのではないかと推察致します。もう一つ、日本の歴史を考えるとときには、戦争というものは無視できない。第二次世界大戦後、



日本は復興するには大変な努力を払わなければならなかったでしょう。このようないろんな困難があることを考えると、一つの国としてまとまるためには、特別な国民を作らなければならないだろうと考えます。

現在の日本が形成される過程で、過去100年程度振り返って見たのですが、今度はデンマークが形成された過程を考えてみます。まず、デンマークには大きな自然災害はない。地震も津波もない。国土はまっ平で一番高い山は標高178メートルしかありません。パンケーキみたいですね(笑)。このように自然環境を考えても、日本に比べてデンマークの国づくりの敷居はずっと低い。デンマークは大きな困難を経験したことはない。特にヨーロッパだったら第一次世界大戦、第二次世界大戦はどうだったかということが問題になりますが、デンマークはどちらの戦争でもドイツに占領されましたが、戦闘はなく、戦闘による被害もなく、ドイツ人が引き上げた翌日から通常通り生活ができたのです。

デンマークの近代の歴史を考える上で一番重要

なのは、フランス革命があった1789年という年です。この年には、それまでデンマークには農奴制がありまして、数少ない大地主のもとで多くの貧しい農民が隷属して暮らしていました。1789年にその農奴制を支えている法律が廃止され、そこで一夜にして何万人の人たちが突然自由になりました。それまで農奴だったから主体性は許されなかった。そのため、解放された自分たちがこれからどのように生きていくかを自分たちで決めなければいけない状況をはじめて突き付けられることになりました。

本日の話の核になるグルントヴィは、多才な人物で、牧師であり、教育者であり、詩人であり、思想家であり、政治家でもありました。グルントヴィは、1780年前後に生まれ、ここに書いてある年表とともに育って生きぬいた人です。19世紀はヨーロッパ全体にとって激変の時代であり、例えばノルウェーのように初めて国として独立するところもありました。つい先日、スコットランドの分離独立を問う選挙がありましたが、イギリスが今の形になったのもほぼ同じ時期です。デンマークにおいては1848年に絶対王政を廃止して憲法を立てました。このように19世紀というのはヨーロッパにおいて新しい国のあり方を模索するような時代だったのです。

19世紀でもう一つ忘れてはならないのは国民的、民族的な芸術が花を開いた時代でもありました。例えばフィンランドにおいて、フィンランドらしい音楽が作曲されるのもこの時期ですし、画家にしても音楽家にしても文学者にしても、その民族的な芸術のほとんどがこの19世紀に創出されたものです。

さて、デンマークの教育制度について説明します。0歳児～5歳児までは保育園・幼稚園です。それ以外には、例えば自分の子どもを、子どもを預かる仕事をやっているおばさんに預かってもらおうということもあります。

次は、6歳～15歳、デンマークではフォルケスコレと呼んでいるのですが、これは日本では小学校と中学校の時期にあたるものです。義務教育

の時期で、小・中一貫校で9年間の教育が基本ですが、本人の意思で10年生までいくことが出来ます。ただしデンマークでは義務教育の期間と言っても学校に行く義務はなく教育を受ける権利があるということです。日本では学校で使う教科書、科目だけじゃなくて教育の中まで事細かに決めていると聞いていますが、デンマークではどういう科目を置くのかということ以外には政府は介入しない。そうしますと、どういう教科書を使うのか、あるいは教科書を使わずに自分で教材をつくることも自由です。

さきほどの10年生にあたる15～16歳の1年間、自分で選んでいく私立学校があり、これが宿舎性になることもあります。フォルケスコレから高校に直接行く場合もあり、本人の意思次第で自由選択です。私の学校には、この寄宿舍性の学校もあります。

グルントヴィが当時のデンマークをみて、最初に思ったのはその解放された元農奴たちをどうやって国民にまとめ上げるかということです。彼がとった手法というのが、トップダウン的なやり方ではなく、多くの元農奴たちと、「あなたたちはどうしたい」、「どうなりたい」、「何がやりたいのか」という話し合いを何度も何度も重ね、多くの時間を費やし議論したのです。

その長い話し合いの過程の上に到達したのは二つの概念です。一つは「生涯教育」、教育は生涯を通してやらなければならないということです。もう一つは「共通のアイデンティティ」です。補足しますと、農奴であった人たちは「私はどこの村の出身だ」という意識はあっても、「私はデンマーク人だ」という意識はおそらく持っていなかったでしょう。そういう意味で、共通の国民であるというアイデンティティをつくる必要があったのです。

このようにグルントヴィは、今の民主主義的なデンマークに作り変えた人ですが、そのために、まずフォルケスコレをつくりまして、そこは子どもたちが通いました。次に、フォルケホイスコーレをつくりました。これは大人たちのための

学校でした。それはどういうことかという、農民たちは冬になると仕事がそんなにないので、冬の間は学校に行って勉強します。そして暖かくなって農業ができる頃になったら、春から秋までは農業をしました。

このフォルケホイスコーレは、現在でも存続しています。しかし、その内容は多様を極める、グルントヴィの生を考える場としての学校や、趣味として勉強したいものを勉強する所もあります。いずれにしてもそこでは、非常に多様なものが学べます。たとえば、芸術、スポーツ、デザイン、心理学などさまざまです。現在は夏休みに一家そろって学校にいった一週間宿泊し、子どもたちが自分の好きなスポーツとか楽しい活動をしなが、お母さんが東洋料理を勉強して、お父さんはお父さんでやりたいことを勉強するということがあります。

これからデンマークの学校について説明していきます。公立学校についても折に触れて話しますが、大部分が私立の話というのを念頭においていただければと思います。グルントヴィの義務教育に当たる教育に関する考え方は、子ども時代、子ども固有の時期であるということです。子ども時代と、その後の大人の教育を一緒にしてはなりません。子ども時代は、子どもが子どもらしく生きることを保障しなければなりません。もう一つはすべての子どもたちは違います。あるいはすべての子どもはそれぞれの個性をもっています。これを尊重しなければなりません。

このスライドは、子ども時代のモーツァルトの絵です。5、6歳頃だと考えられています。この絵で注目してほしいのは、ここにいるモーツァルトが小さな大人として描かれていることです。服装も、髪型も、やっていること(チェンバロを弾いている)ことも、これは全部大人のやることです。モーツァルトは若いころから父親によって大人の世界に連れていかれて、彼は死ぬまで大人の世界でしか暮らせなかったのです。

このスライドも、若い女の子に大人の格好をさせている絵です。それによって彼女たちを大人の

世界に引きずり込むことになります。服によって大人っぽくは見えるのですが、彼女たちはまだ子どもの年齢です。こちらのスライドは、私が理想とする子ども像ですが、一つ先のスライドの子どもと同じくらいの年齢です。しかし、この子どもたちを見ると、それぞれ個性をもった子どもたちとして、尊重されているということが分かります。子ども時代をちゃんと子どもらしく過ごさなければ、大人になっても、何か積み残したような大人になります。発達段階の飛び級はできません。子どもとしてやらなければならないことをやはりやらなければなりません。

たとえば、子どもの育つ過程を、このスライドにあるような小さな苗にたとえて考えてもらえばいいのです。苗を保護するために、大人の手のひらに乗っています。強い風が吹いたときには風から守ってあげる。育つために太陽が必要なので太陽の当たる所に持っていく。そのようなことはしますが、苗にちゃんとした栄養のある土をあたえて、太陽と水をあたえてあげれば、苗は自分で育つものです。「育て育て！」といちいち言わなくても育つものです。

自分の家庭菜園でニンジン育てようとする場合、そのニンジンがどのくらい育ったかを、毎日テストでもするように測る人はいませんね。ニンジンも子どもも、条件が良ければ自然と育つものです。それぞれの能力は違うかもしれませんが、自分ができるだけのことを子どもが自発的にします。

子ども時代にしかできないものは自尊心を持たせることがいちばん重要です。この写真の子猫が自分をライオンとしてみているように、そういう自信を子どもに持たせなければなりません。それは子どもにとって一番必要なものです。

ここにある数学の授業のような図は何を表しているかという、大人の学習の様式を表したものです。しかし、子どもはそういう方式で学習しません。子どもは右上がりの直線ではなく一つのものととも集中してやります。たとえば、縄跳びであったら練習を朝から晩までやります。しかし

飽きてしまって、コンピュータゲームをやりたくなったらコンピュータばかりやります、いずれはあきるので、また何か別のものをやります。爆発的にやれば高いレベルには達成しますが、一定の時間が過ぎれば、別のものに移ります。それが子どもの自然な学習のやり方であります。無理に大人と同じように積み上げ方式でやらせようとしても子どもは対応できません。強制してはいけません。

次に、どういうモデルに基づいて学校を創るかかという問題があります。一つのモデルとして考えられるのは大学です。大変高度な資格を持って、それぞれの領域の優れた専門家の先生を集めて、その人たちが講義をする、宿題を出す、試験をする、自習勉強をさせ、評価をします。このような勉強も考えられます。しかし、私の学校ではそういうモデルをあえて採用していません。子どもたちは、この写真(デンマークの住宅街)のような環境から学校に来ます。このような住宅街の中では、それぞれの地域の特徴・特性があります。それだけではなく子どもたちが関わっている大人たちによっても、それぞれの家の伝統というものがあります。たとえば、クリスマスの飾りつけにしても、それぞれのやり方があります。

だから、子どもたちは学校に来る前にすでにたくさんのことを学習しています。まず、言語を取得しています。自分の靴ひもの結び方を覚えている。ドアの開け方、シャワーの浴び方、その他もろもろ…。現代っ子は、iPadの使い方を学校に入る前から学習しますが、これは教室もなければ教師もいない、誰かが教えたわけでもない、子どもたちが自然と学習したものです。このような自然に学習する環境をモデルにしたいと考えました。

家庭だったら、「きみはドアの開け方がまだできていないので毎日15分間ドアの開閉の練習をきなさい。宿題です。」とは言いませんよね。また、家庭では試験をして、子どもに点数を付けたりはしません。たとえば、子どもに洗車の手伝いをさせた時、「今日はとても上手にできたので本日の車洗いは8点にします。」とは言わないです

よね。大人の専門教育においては、点数をつけたり並べたり比べたりすることは意味あることですが、子どもの教育においてそれは意味をなしません。子どもは条件を整えれば、自分のベストを尽くしてやりますので点数をつけることに意味はないのです。

子どもの学習する能力はそれぞれ違います。分かりやすい例で言えば、女の子たちは静かに机に座って、言われたとおりにやるのが得意ですが、男の子たちは落ち着かないので同じようにしてもよく学ばません。そこで、私の学校の教室には、机もあればソファやマットレスもおいてあります。横たわりながら数学を学習してもそれはいいんだということにしているのです。

先生にとっても、自分の学校が、大学や公立学校に見えないことも重要です。そのために、私の学校には大きな暖炉があります。暖炉を囲うようにソファが置いてあり、子どもたちはそこに行って学習してもよいことになっています。9年生になると、教室にはソファがあつたりギターがあつたりボードゲームが置いてあつたりします。また、生活を区切るためにいちいちベルを鳴らすことはないです。宿舎では、皆さん、今から寝ます！とベルを鳴らしません。皆さん寝ましょうね、と声をかけ、皆で就寝します。私の学校では時間割をチャイムなどで知らせたりはしません。

私の学校では、年に3回、日本でいう授業参観があります。しかし、これには母親だけが来るのではなく、両親が来ます。土曜にやるのですが、土曜は休日なので保護者が参加しやすいという理由があります。このようにして、保護者に、私たちの授業にあなたたちが参加することが重要だというメッセージを伝えます。また遠足に行こうとした時に、車が4台必要だとなったら、保護者に呼びかけます。

これが2週間前にあつた授業参観で、1年生が授業を受けています。英語の授業なんですけど外にでて、歌や動作を通して単語を学習しています。教室の後ろで親が見下ろす形ではなく、一緒になって参加しています。これも、授業参観の写真

ですが、保護者が教室に入り、絵を描くことを一緒にやっています。大事なことは、子どもと保護者が先生と一緒に共有できる空間を作ることです。保護者、子どもで区別するのではなくて、皆そこにおいて共通のものを体験することが重要です。

学年の終わりには各学年でまとまってミュージカルをつくります。去年のテーマは、デンマークの文化を集めた200枚の写真という出し物でした。そのデンマークの文化というのは建物だったり、ポップカルチャーだったり、新旧織り交ぜたものでした。各クラスにあなたたちでこのデンマークの文化について発表しなさいという課題を投げかけました。

10の学年から10通りのデンマークの文化の短い発表を1つにまとめた出し物となりました。

このミュージカルを作るには10の違う発表を、どうやって1つにまとめるか先生方がいろいろ知恵をだし、一人の先生がこのようにな絵にまとめました。現物は、縦2m横1.5mで、その絵ができたなら学校でこのようにしてポスターにしたり、絵葉書にしたりし、保護者が記念に買えるようにしました。また劇のために、違う先生が音楽を作りました。その楽曲とパフォーマンスをDVDにまとめ、それも購入できるようにしました。このミュージカルを上映する前の2週間は子どもたちは通常の学習をせず、ミュージカルのためだけに費やします。その中では、たとえば論理的に考えること、演技をすることなどいろんなことを学習できました。

義務教育の最終学年では、すべてのデンマークの生徒たちは共通の試験を受けなければなりません。私の学校の生徒たちは、それが入学してから最初の試験になります。彼らは試験勉強もしたことがありませんが、その成績は公立学校の生徒たちに引けを取りません。それから何が言えるかというと、ただ教科だけを勉強しても人格は形成されません。たとえば2週間ミュージカルを作ることに専念することも重要な学習なのです。

これから時間が許すなら、私は少しデンマークの教育と日本の教育の違いについて触れたいと思

います。しかし、その場合はどちらかが優れているというようなことは全く考えていません。それぞれの長所、短所がありまして、システムとして違うもので、その違いが重要であって、良し悪しを付けるものではないのです。たとえば、日本に来てみて日本は教育制度が非常に管理化されているように思いますが、人々は非常に親切で、すぐ助けてくれる。また、3.11のような震災がデンマークで起こったら、あのような助け合いがあったでしょうか。おそらく、3年が経過しても、片付けも終わらないだろうと思います。そのような違いは、良し悪しではなくて、それぞれの環境によって違いがあるということです。

宮城学院の皆さんにアンデルセンの醜いアヒルの子の絵をプレゼントしたいと思います。白鳥の子がアヒルの中で育っても、結局は美しい白鳥になりました。子どもたちは、そのような力を持っています。ご清聴ありがとうございました。

(本研究会は、2014年9月25日に開催されました。なお、研究会において、デンマークの教育におけるグルントヴィの役割について紹介がありましたが、詳しくは、発達科学研究2012年12号(79-89頁)掲載の東海大学難波克彰名誉教授のご講演をご参照下さい。http://www.mgu.ac.jp/main/library/publication/pre_hattatsu/no12/hatsurin12_12.pdf)

